
狂人ピアノ

秋島キサト

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

狂人ピアノ

【Nコード】

N8935A

【作者名】

秋島キサト

【あらすじ】

ある裕福な家に生まれた少女は、ひたすらにピアノだけを弾かされ続けます。手が無くて、腕が無くて、体が無くて。

少女が居ました。少女は、とても裕福な家に生まれました。少女の両親はとても厳しくて、この少女に何か一つのことを徹底的にさせるべきだ、と考えました。それで少女を世界一にしよう。そう思った両親は、やっと立てるようになった頃の彼女に、ピアノを習わせ始めました。

広い広い少女の部屋の真ん中には、立派な真つ黒いグランドピアノがあります。四角い小さな窓が一つ、ピアノの正面の壁にあります。その反対側の壁に、立派な重々しいドアがあります。それ以外何もありません。硬い赤い絨毯が、彼女の足元を固めています。高い真つ白な天井は、シャンデリアが照るとちかちか光りました。クリーム色をべったり塗った四枚の壁は、全て彼女から離れていきます。少女は常にピアノの前の椅子にじっと座り、いつも鍵盤に指を置いていました。食事は召使いが運んできて、その場で食べます。寝るときは、椅子に座ったまま、鍵盤に突っ伏して眠りました。少女が幼かった頃は、夜中によく、なんとも不愉快な不協和音が聞こえたものです。

少女は外に出させてもらえませんでした。毎日一曲の楽譜を渡され、次の日までにそれが弾けないと父親にぶたれました。日が照っているうちは講師がやってきて、彼女にピアノをたたき込みました。その後、彼女は閉めきった部屋で狂ったように練習をします。部屋が密閉されている限り、音は外に漏れることなく、赤い絨毯と白い天井とクリーム色の壁に吸収されていきました。

彼女は、外に出たいと思ったことはありません。世界にはピアノがあるだけだからです。

彼女は、楽譜以外の言葉を知りません。誰も教えてくれないからです。

同じ年頃の少年少女が、学校に通って淡い恋をする頃も、彼女は

酸素の薄い部屋でひたすら鍵盤を叩いていました。

その日渡された楽譜は、いつもより少し難しいものでした。明日までに弾けるようにならないと、父親にぶたれます。ぶたれるのは痛いので、少女はそれが好きではありませんでした。だから、繰り返し繰り返し、同じ鍵盤を叩いていました。

その時です。激しい鍵盤の音の隙間に、こんこんと小さな音が潜り込みました。

少女はびたりと指を止めて、椅子に座ったままぐるりと振り返りました。この音を聞くのは、決まって、父親と講師がやってくるときです。だから少女は、ドアを見ます。しかし、少女は、部屋が暗いことに気が付きました。二人がやってくるのは、部屋が明るいきだと決まっているのです。それ以外の時間に、彼らが訪れることは絶対にありません。

彼女は立ち上がって、ピアノの椅子から離れました。正面の壁、窓を見ます。

そこで彼女は、初めて父親と講師と召使い以外の人間の顔を見ました。

四角い窓の外に、少年の顔がありました。年頃は少女と同じくらいですが、そんなこと少女には分かりません。丁度少女のピアノと同じような、真っ黒な髪と瞳を持っていました。どこも見ていないような目で、少女の方を向いてじっとしていました。襟だけ見える服も真っ黒で、夜の闇にとけ込んで流れていきそうです。

少女は不思議に思ったのと、怖いのと、好奇心とで、ゆっくり窓辺に近づきました。家の中と外で、地面の高さが違うからなのか、少年は少女より背が低く見えました。

少女は少年を見つめたけれど、言葉を知らないのです、唇を少し動かしたまま、黙っていました。少年はどこも見ていないような目で少女を見ていましたが、不意に、悲しそうな顔をします。

「かわいそうに……。ずっとピアノを弾かされ続けて居るんだね」少女は、少年のいった言葉を理解することが出来ませんでした。

すると突然、少年の手が、少女に向かって伸びてきました。その手は窓ガラスを破り、少女の腕を掴みます。ガラスの破片で傷ついた手で、少年は、同じく傷ついた少女の両腕を持ち上げさせました。そして、窓枠越しに、少女のやせ細った両手を自分の前に差し出させました。

少女は訳が解らず、という言葉もなく、ただ少年のなすがままにされています。

少年が、一度屈みました。立ち上がったとき、手には、何か銀色に光る、大きなものを携えていました。薄い銀色の板が二枚、「x」の形に交差しています。下半分は木で覆われているようでした。実はそれは、鋏というものを切るための道具なのですが、少女はそれを知りません。手をさしのべたまま、黙ってそれを見ていました。

少年は、自分の腕と同じくらいの長さのそれを両手でもって、突然、銀色の部分で少女の手首より少し上の部分を挟みました。

月光を受けて銀色が光ります。

じよきん。

さつきまで少女の体についていたものが、一つ、窓の外にぼとつと落ちました。続けて、じよきん。もう一つ、窓の外にぼとつと落ちました。

少女は、今まで一度も感じたことのない激痛に、狂ったような悲鳴を上げました。

しかし、少年はとても嬉しそうに笑います。彼女の悲鳴など聞こえないかのよう。

「ほら、これでもう、ピアノを弾かなくて済むよ」

それだけ言っ、少年はくるりと踵を返し、走り去っていきました。少女は絨毯に倒れ込み、どたん、ばたんと転げ回りました。手のない両腕から血が吹き出て、たくさん絨毯に染み込みましたが、絨毯は元々赤だったので、色は変わりません。

少女は一晚、鼓膜が破れるほどの叫声を上げ、部屋中を駆け回っていました。

次の日から、父親と講師が来なくなりました。

それでも少女は再び椅子に座り、ピアノを弾きます。あるはずのない指を鍵盤に載せて、練習の途中だったあの曲を弾きます。聞こえるはずのない音が、赤い絨毯と白い天井とクリーム色の壁に吸収されていきました。少女は痛みさえ押し殺すように、脂汗を流しながら必死で腕を動かします。

また、夜が来ました。部屋の中が暗くなり、それでも少女は椅子に座っています。

こんこん、と、少女の耳のピアノの音に、小さな音が潜り込みました。

少女は一瞬動きを止め、しかし、またピアノを弾き始めました。立ち上がりもせず、聞こえない振りをして、一心にピアノを弾いていました。

不意に、視界の端に、黒い人影が現れます。

少女は恐怖に歪んだ顔で、彼を見上げました。

「もう、ピアノを弾く必要はないのに……」

少年は悲しそうに言います。手には、あの、銀色に光る鋏を持っています。

少女はとっさに立ち上がろうとしましたが、少年が足で少女の腿を踏みつけ、椅子に押さえつけて止めました。彼の両手が、重々しく鋏を開きます。

少女は叫ぶことも出来ず、その刃が、自分の肩を挟むのを見ているしか出来ませんでした。

じよきん。じよきん。

少年は、少女の両肩を立て続けに切りました。

「ほら、これでもう、ピアノを弾かなくて済むよ」
失神した少女に、少年はとても嬉しそうに言いました。

それでも少女は、ピアノを弾き続けます。父親が来なくても、講師が来なくても、腕が無くて、全身を大きく動かして、さながら腕も手も指もあるかのように、一心不乱に鍵盤を叩き続けます。顔中を脂汗が流れても、目を開けるのが精一杯でも、ひたすらひたすら、狂ったように音を出します。

窓は割られたままですが、日が出ているうち、人が来たことはありません。

また、夜がやってきました。

少女は言葉を知りませんから、考えることは出来ません。しかし、彼女は既に、今夜もまた彼が来ることを知っていました。そして、彼女の予想通り、彼の影は彼女の視界の端に現れました。

「どうして……？」

少年は呟きます。少女は、練習をやめて、少年を見上げました。

「どうして……？もう、この屋敷には、君以外生きた人間など居ないのに……。君はもう、自由なのに……。ピアノなんて、弾かなくて済むのに……」

少年は、とてもとても、悲しそうでした。哀れんで、包み込むような、そんな口調でした。

少女は彼の言葉を理解することは出来ませんでした。じつと彼の顔を見つめて、小さく唇を動かしていました。

言いたいのに、言葉が見つからない。

言葉を知っているものならば、そういうでしょう。

少年は、また、手に鋏を持っていました。

ゆつくりと、その刃で彼女の首を挟み込みます。彼女は冷たい刃の感触に、しかし、怯えることなく、ただ、とても何か言いたげに、しきりと、小さく唇を動かしていました。

「残念だ……。残念だよ……」

少年は目を閉じ、祈るように呟きます。少女は重たい目を見開いて、ずっと、彼の顔を見つめていました。少年の両手が、近づきます。

じよきん。

さっきまで彼女の身体と繋がっていた部分が、ごとりと、絨毯の上に着きました。

椅子に座っていた腕と首のない体が、ずるりと横に倒れます。頭の無くなった部分からは勢いよく血が噴き出していて、いくら絨毯が赤いとはいえここまで吸収出来ないでしょう。どくどくと、絶えず、彼女の身体から唯一の証が流れていきます。生きていた証が少年は二つの彼女を見下ろし、ちよつと俯いた後、踵を返そうとしました。

その時です。

「……ピア、ノ……」

少年の足下から、うめき声にも似た、消えていきそうなソプラノの声が聞こえてきました。

少年は振り返り、それを見下ろします。

彼女の頭が、絨毯に転がり自身の髪の毛に埋もれた頭が、少年の方をじっと見ていました。

かさかさになった唇が、小さく、ほんのわずかに動いて、言葉を紡ぎます。

「フォ、ルテ……リピート……エンドレ、ス……」

血走った目で少年を見上げて、彼女はそう言いました。生まれて初めて、彼女が発した言葉でした。

部屋が広すぎて、赤い絨毯も白い天井もクリーム色の壁も、その言葉を吸収しませんでした。

少年は黙って、悲しそうに、ただ悲しそうに、彼女の顔を見下ろしています。

やがて、静かに踵を返して、入った窓から去っていきました。
少女は血走った目で、彼の消えた窓をいつまでも見つめています。

「……………で、両親も講師も召使いも、大広間で殺されていたんだってさ。あの屋敷に残されたのは、死体のみ」

「やあだ、やめてよ怖いじゃない！」

「でもね、おかしいの。その女の子の死体だけ、無かったのよ」

「え……………？」

「もしかすると、まだ動いていて……………」

「き、きゃー！！ほんとにほんとにもうやめてー！！」

「あっはは、冗談よ……………ん？」

「こ、今度は何……………？」

「今、ピアノの音しなかった……………？」

少女はピアノを弾き続けます。父親が来なくても、講師が来なくても、体が無くても、さながら腕も手も指も体もあるかのように、一心不乱に鍵盤を叩き続けます。ひたすらひたすら、狂ったように音を出します。

今夜も、また。

(後書き)

旅行中ふと思いついたので連載ほったらかしで執筆。どうもすみません……。

そしてピアノ好きな方ごめんなさい。

かく言う自分もピアノ好きですが。

文章長くて、携帯の方は読みづらいかと思います。ご容赦下さい。

最後の女の子たちの会話は、入れるかどうか迷いました。

感想・意見、お待ちしております。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8935a/>

狂人ピアノ

2008年8月29日19時32分発行